

展望

短歌にとつて比喩とはなにか

三沢 左右

七月一日現在、ロシアのウクライナ侵攻はなお継続中である。

プーチンをヒトラーになぞらえるような言説を聞く。少し前には安倍がヒトラーだった。一方、ロシア側もウクライナに「ネオナチ」のレッテルを貼り、侵攻を正当化しようとする。「ヒトラー」や「ナチス」といった表象は、ほぼ自動的に、読者を単一のイメージに誘導する。すなわち「悪の独裁者」「戦争犯罪」などだ。

しかし、当然だが、プーチンはヒトラーではない。安倍もそうだ。安直な比喩は、違うものを単純化して同じものとしてしまう。そうした比喩に自足してしまつた結果、細やかな違いに気づく観察眼はくもる。

本来、比喩は一首の鑑賞、解釈に広がりを与えらるものであるはずだ。

tonon*と平井弘の歌集を読んだ。作風は全く異なるが、どちらも比喩、象徴表現を使いこなして作品に広がりを生む作者だ。

周波数くるつたラジオ抱えれば合わせるまでの手のなかは海

tonon*『イマジナシオン』

飲み干したデカビタの瓶、重たくていつか捨てたくなるのか犬を

一首目、的確なラジオの描写から、結句で提示される「海」のイメージの広がり心地いい。連想の軸に視覚ではなく聴覚を置くところにも工夫が冴える。二首目、犬の重みと「デカビタの瓶」にたとえる。同じような重さを持つものは他にもあるだろうが、「デカビタの瓶」が喚起する確かな存在感、さらには時間を凝縮したような感傷は、他のものには代えがたい。

tonon*の作品は、身近な景や定番の題材を多くの人に伝わる言葉で詠みながらも、短歌の核である情感を読者に委ねることで、類型的にならない新鮮さを湛える。そうした新鮮さは、言葉ひとつひとつを工夫し、自身の一回限りの経験や実感を一首に込めようという表現意識から生まれるのだろう。

やつてしまへみおろして鴉そんなに啼くものだから やらうかなあ

平井弘『遣らず』

肩ひもをおとしてをんながおもくなつた庭のかたつむりがずるり

一首の独立性と完結性の強いtonon*の作品に比べ、平井の作品は、一首ではその背後のイメージが像を結ばないことが多い。しかし、歌集全体を通して同じモチーフが変奏されながら繰り返されることで、見えなかつたものが少しずつ形を持ち始める。

一首目では、目の前の鴉に、内心の声が溶け合う。「鴉」は歌集中に繰り返し現れ、「死」を連想させるモチーフだ。戦争に関する言葉自体は多くないが、一冊全体は戦争と死のイメージに満ちる。また、結句「やらうかなあ」も面白い。平井の短歌にしばしば入り込む独語のようなフレーズは、一首に観念を超えた迫真性を与える。二首目、平井作品のもう一つの特徴に、複数の景や思考が一首に並行して込められる点がある。「をんな」と「かたつむり」とが、どちらが実景なのか比喩なのかわからないままに重ねられ、さらに作者の重々しくどこか不快な実感までが一首に表現される。私たちと世界とのかわり方は実際のところこうなのかもしれない、という奇妙な説得力がある。そこには、単純化され硬化した言葉ではない、柔らかな実感が湛えられている。